

Paul Gallico とサーカス・エンターテインメント

—*Love, Let Me Not Hunger* を中心として—

尾 上 典 子

まえがき

- I Sam Marvel Circus の冬季宿舎本部についての考察
 - II スペイン巡業中の Marvel Circus が遭遇した災厄についての考察
 - III サーカスの動物たちを襲った餓死の惨劇についての考察
 - IV Rose と Albert 老人の献身により復活したサーカスと生存者たちの人生についての考察
- 結び

まえがき

Love, Let Me Not Hunger (『愛のサーカス』) は、サーカス芸術に対して生涯、情熱的な愛情を抱き続けた現代アメリカ作家 ^{ポール・ギャリコ} Paul Gallico (1897 年—1976 年) が 1963 年に発表した長編小説であり、サーカスの人々が自分たちの動物たちに捧げた燃えるような愛情を主題としたこの作品は、Gallico の最高傑作と呼ぶにふさわしいものである。21 世紀初頭現在、サーカス小説としてアメリカのみならず全世界で称賛されている作品は ^{サラ・グルーエン} Sara Gruen の *Water for Elephants* (『サーカス象に水を』, 2006 年出版, 同作品は 2011 年に映画化, Francis Lawrence 監督, Reese Witherspoon, Robert Pattinson 主演, 20th Century Fox 配給) である。Sara Gruen が Paul Gallico と同様に動物たちに深い愛情を注ぎ、沢山の動物たちとの同居生活を営み、上記のベストセラー小説以外にも動物小説を発表していることは注目に値するし、Gruen が *Water for Elephants* 執筆にあたりアメリカ・サーカス史を綿密に調査したことは称賛されるべきであるが、カナダに生まれ 1999 年にアメリカに移住した彼女がサーカス研究に没頭したのは(彼女自身が述べている通り) 僅か約 4 か月半である¹⁾。これに対して、Paul Gallico は 1939 年に発表された傑作小説 *The*

Adventures of Hiram Holliday (『ハイラム・ホリデーの冒険』)の中で Paris のサーカス劇場の女曲馬師を活写して以来、動物小説、冒険小説、恋愛小説、ファンタジー小説、伝記小説、推理小説、スポーツ小説など多種多様な分野の小説を創作した 35 年以上の文筆活動において、殆ど全ての作品の中で欧米諸国のサーカスについて言及しており、彼が生涯にわたってサーカス芸術を熱愛した事実は、国際的ライヴ・エンターテインメントについて論じる上で極めて重要である。そして、彼がモナコのレーニエ大公 (Rainier 三世) と極めて親しい間柄で、モンテカルロで晩年を過ごしたという伝記的事実から、我々は Gallico と Rainier 三世を結び付けていた深い友情が、サーカス芸術に対する両者の熱愛によって生まれたものに違いないと推察できる。2011 年に発表した拙稿「Paul Gallico とサーカス・エンターテインメント—*The Day Jean-Pierre Joined the Circus* を中心として—」において指摘した通り、観光立国政策が効を奏したモナコ公国において、Rainier 三世は 1974 年にモンテカルロ国際サーカス・フェスティヴァル (Festival International du Cirque de Monte-Carlo) を創始し、サーカス界のアカデミー賞に相当する各賞が国際的アーティストたちに授与されるこのイベントは毎年 1 月中旬に Monte-Carlo で開催され、世界最高の権威と伝統を誇るサーカス競技会としての名声を博し続けている²⁾。創始者 Rainier 三世の逝去後、モンテカルロ国際サーカス・フェスティヴァルは、2006 年以来、彼の娘である Princesse Stéphanie によって主宰されている。更に Princesse Stéphanie は、彼女の父の理念を具現化し、全世界のサーカス芸術とサーカス文化を保持・増進するために世界的規模のサーカス共同体を結成することを目的として 2008 年にモナコ公国に設立された世界サーカス連盟 (Federation Mondiale du Cirque) がサーカスに登場する動物たちおよびサーカス芸術の在り方について、いかなる展望を持っているかについて次のように語っている。

「サーカスにおける動物は、伝統サーカスあるいはいかなるサーカスにおいても支柱を成す要素のひとつである。象、馬、ライオンや虎などの大型の

ネコ科動物あるいはアシカの演技が存在しないサーカスを想像することは、私には不可能である。それはミュージックホールの演し物やショーとは言えるだろうが、サーカスとは全く異なる類いのものであろう。動物の登場しないサーカスなど、私には想像もできない。それは、道化師、アクロバット、音楽、照明の存在しないサーカスの将来像を想像するのと同じくらい不可能なことである。動物たちは立派な資格を備えたアーティストである。そして私は、動物たちが、ショーの重要な要素を成すアーティストとしてみなされるべきであると考え。」³⁾

上記の引用文から明らかな通り、現代サーカス芸術の推進者である Princesse Stéphanie は、サーカスに出演する動物たちをサーカス・アーティストとして認め、動物たちに愛情と敬意を払うように力説している。これは、サーカスを熱愛した作家 Paul Gallico の信条と全く共通したものである。彼が、Cirque シルク・ ブリオネ Bouglione (現在のフランスの シルク・ディヴェール・ブリオネ Cirque d'Hiver-Bouglione) のスターとなった賢いモルモット Jean-Pierre を主人公として書いた心温まるロマンス *The Day Jean-Pierre Joined the Circus* (1969年) は、時代と世代を超越して世界中の読者を魅了する小説であり、すでに70歳を越えた Gallico は、読む人々の心に安らぎと喜びを与えることを目的として、物語に登場する全ての人々を善意に満ちた愛すべき存在として描写したサーカス小説を発表した。これに対し、*Love, Let Me Not Hunger* は、Gallico が極めて精緻な筆致でサーカスを描いた作品であるとともに、実は Gallico の畢生の大作であったが、極限状態に追い詰められた人間の情念が克明に描き出され、悲劇的色彩が読者に与える印象が余りにも熾烈であるため、Gallico の激情が迸り出たこの古典的名作を冷徹に考察し、正当に評価する研究者が、これまでに存在しなかったのではないかと私には思われる。しかし、サーカスの人々の動物たちに対する献身的な愛情を主題とした傑出したサーカス文学作品であると同時に、1960年代のイギリスにおけるサーカス経営の実態を分析した *Love, Let Me Not Hunger* について綿密な考察を行なうことは、文化産業としてのサーカスさらに敢えて言えば

21世紀を担う国際的エンターテインメント・ビジネスの中核となる潜在性を持ったサーカス・エンターテインメントを進化・発展させるための一助となることを信じて、本稿を執筆するに至った。

【注】

- 1) Sarah Gruen, *Water for Elephants* (Detroit: Gale, Cengage Learning, 2006), P.556.
- 2) http://www.circopedia.org/index.php/International_Circus_Festival_of_Monte-Carlo.
- 3) <http://www.montecarlofestival.mc/s-a-s-la-princesse-stephanie/>

I Sam Marvel Circus の冬季宿舎本部についての考察

Love, Let Me Not Hunger に登場するサーカスの所有者 Sam Marvel は旅回りの縁日の安っぽい見せ物から始めて、長く困難な歳月の後に成功を遂げ、約15年前からサーカスの興行主となった男で、彼の所有する Marvel Circus は、規模は小さいながらも非常に優れた演目を見せるサーカスとしての名声をイギリス中に馳せていた¹⁾。しかし彼は、自分のサーカスの集客力が1958年以来次第に衰えてきた要因が、イギリスの町の全ての家にテレビが普及してきたことであると察知し、チップパーフィールド・サーカス Chipperfield's Circus や ビリー・スマーツ・サーカス Billy Smart's Circus のような大規模なサーカスも全く同様の苦境に陥っていると推察して、打開策を打ち出そうと考えた²⁾。

ここで触れられている Chipperfield's Circus はイギリスで最も古い歴史を持つ名門のサーカスで、チップパーフィールド Chipperfield 一族は、凍りついた テムズ Thames 河の上で Frost Fair が開催された1684年に熊の芸を披露して以来、イギリスで動物芸の公演を中心としたショービジネスを行ない、移動動物園 (menagerie) を発展させ、一族の人々はアクロバット、道化師としても活躍した³⁾。特に Richard Chipperfield, Sr. (1875年-1959年) が1930年代にサーカスの規模を大拡張し、1937年に彼の後継者となった長男 Dick と次男 Jimmy が中心となり、第二次世界大戦終結直後に Chipperfield's Circus をヨーロッパ最大の

